

ユニークなコミュニケーションのあり方：高専カンファレンスという輪



八戸工業高等専門学校総合科学科 戸田山みどり

2008年春、とつぜん始まったらしい高専カンファレンスは、たった2年間に10回のイベントを実現している、ある意味では驚異的な企画である。この10回の中には東京で開催されたものが4回含まれているが、のこりは、札幌、福井、久留米、いわき、長野、八戸というように地方の高専が受け皿となって開催されたものが半分以上となっている。また、このカンファレンスの特徴は、最初からインターネットで同時中継されていることで、その会場に直接居合わせることができなくても、ネットを通じて参加できることがあげられる。参加者は、投稿によって、間髪を入れずに発表に対して反応を表明することができるという形式は、一方的な研究発表を見慣れた目には、新鮮だ。(もっとも、発表者の目の前にいる聴衆が、それぞれのノートPCに向かって感想を書き込んでいる姿は、ちょっと異様なものだったが。)

はからずも、私は去る1月30日に八戸高専で開催された高専カンファレンスin八戸に、開催校の教員として関わることになり、はじめてその存在を知った。実は、高専自体についてすら、10年前に勤務するようになるまで、どのようなところか私はほとんど知らなかったのである。残念ながら、半世紀近い歴史がある割には、世間おおかたの高専に対する認識というのはかつての私程度のものではないかと思う。しかし、その一方で、半世紀の歴史は高専独自の文化というものを育んできており、また、優秀な人材を輩出してきた蓄積も大きい。高専の教員ではなく、卒業生や在校生の中から、自分たちの文化に即した情報交換の場を求める機運がたかまったのも、当然のことではないだろうか。

しかしながら、高専カンファレンスの画期的なところは、高専という枠に依拠することで、分野横断的な情報交換の場をつくったことではないかと思う。高専生は若いうちから同じ校舎で学び、学寮や部活動で非常に密接に接することで、一般の高校生や大学生以上に緊密な人間関係を結んでいる。しかし、その一方、専門分野のことになると、意外に互いの研究内容までは知らないことが多いようだ。たとえば、本校では卒業研究の発表会は学科ごとであり、他学科の学生が友人の発表を聞きに来ている姿を見るなどということはまれである。多忙のため、教員も他の学科の発表会に参加するのはなかなかたいへんらしい。専攻科の特別研究発表会は、人数の問題もあって全専攻共同で行われるのだが、7年目になってやっと他学科の発表を聞くというのは、いささか残念だ。

高専カンファレンスで取り上げられる話題は、どうやら本格的な専門に関するものばかりではないが、だからこそなおさら、分野横断的な、このような機会はあるように思われる。科学・技術の世界と一般市民との間での科学コミュニケーションの重要性がますます認識されている昨今、まず同じ工学専攻の中での分野を超えたコミュニケーションがはかられることが必要だろう。その意味で、高専カンファレンスのような気軽に参加できる親密な活動がひろまって行くことを願ってやまない。

なお、今年度最初の高専カンファレンスは4月24日に東京のサレジオ工業高等専門学校で開催される。そのあと、北海道、関西、九州でそれぞれ準備にとりかかっているという。今後の予定、過去の記録等は高専カンファレンスのサイト (<http://kosenconf.jp/>) で直接確かめることができる。